

## ダビデの若枝を起こされる神様

エレミヤ23章1～8節

2021年11月28日

松田 基子 師

今日から待降節(アドベント)に入りました。アドベントと言いますのはラテン語で、来臨という意味です。主イエス様が来臨される、クリスマスを迎える心の準備をすると共に、今、使徒信条でも告白しましたように、キリストは再びおいでになる**主の再臨に心を備える時**であります。

主イエス・キリストにお会いする為に悔い改めて、汚れた心を聖めて頂く時ですが、それはまた、神様の人類救済のための歴史を振り返り、神様の愛と、**真実に心に向けて、いっそう神様に信頼し、その約束を堅く信じる時**でもあります。聖書に記されています人間の歴史は、人間は生まれながらに自己中心で、神様の存在を教えられても、神様に聞き従い、尽くす事はなく、何時も自分の利益、自分の都合にしか関心が無く、神様に背き続けている姿が記されています。

ところが、神様は何故か、そんな人間をお怒りにはなるのですが、決してお見捨てになる事をなさいません。それが一度や二度ではないのです。聖書を読めば読むほど、神様の愛と真実が、浮かび上がって来ます。人間ならば、とうの昔に見捨ててしまっているものを、神様はご自身の愛と真実の故に、人類救済の歴史を全うされるのです。神様は、具体的には、ご自身の呼び掛けに応答した、アブラハムと契約を結ばれました。その基本の契約は、創世記12章2節に、

「わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように。」

でした。

そこには究極的な祝福が、何なのか、まだ隠されていました。神様の次の段階の契約は、アブラハムの子孫がエジプトに於いて、奴隷となっている状態から、モーセを指導者に立てて、エジプトから脱出させ、一行をシナイ山麓に導き、そこで彼らと契約を結ばれました。

出エジプト記19章5節から6節に、

「今、もしわたしの声に聞き従い、わたしの契

約を守るならば、あなたたちはすべての民の間にあって、わたしの宝となる。世界はすべてわたしのものである。あなたたちは、わたしにとって、祭司の王国、聖なる国民となる。」

と約束されました。

19章8節には、その神様の言葉を受けて、「民は皆、一斉に答えて、『わたしたちは、主が語られたことをすべて、行います。』」

と誓ったのです。しかし、イスラエルの民は、厳しい荒れ野の生活に、不平不満の連続でした。せっかく約束の地の入口に到達したにも拘わらず、先住民への恐れから、民数記14章2節で、

「イスラエルの人々は一斉にモーセとアロンに対して不平を言い、共同体全体で彼らに言った。

『エジプトの国で死ぬか、この荒れ野で死ぬ方がよほどましだった。』」

と言っています。

神様は侮られるお方ではありません。彼らは自分達の言った言葉の通りに、第一世代は、荒野放浪の、40年を通して死んでいきました。そのようなイスラエルに対して、神様は第二世代を育てて、彼らを約束の地に住まわせられました。神様は、約束の地に住まわせるに当たって、十戒の第I戒で、

「あなたはわたしをおいて他に神があってはならない。」

と命じられました。しかし、イスラエルは、先住民の拝む神々に心を惹かれて、

『自分達の思いを満足させてくれる神だ』

と偶像を拝みました。

紀元前千年の頃、神様に心から信頼して従う勇気ある少年がいました。彼の名はダビデです。神様もダビデを特別に愛され、王位を与えられたばかりか、契約を結ばれました。

サムエル記下の7章16節で、

「あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手とこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる。」

と約束されました。ダビデもまた、サムエル記下の23章5節で、

「神と共にあってわたしの家は確かに立つ。

神は永遠の契約をわたしに賜る。すべてに  
整い、守られるべき契約を。わたしの救い、  
わたしの喜びをすべて神は芽生えさせてくだ  
さる。」

といて召されて行きました。

はたしてダビデの家は、神様に聞き従ったで  
しょうか。殆どの王は、神様に聞き従わず、こ  
の世の栄耀栄華を求めて、国民のために正義、  
公正、憐れみの政治は行いませんでした。王  
も家臣も民も皆、自分の願いを叶えたいと、偶像  
に走りました。神様はそんなイスラエルの民に  
対して、預言者を送り、神様に悔い改め、立ち  
帰る様に言われました。しかし、王も民も、神  
様が遣わされた預言者の言葉には、耳を貸さず、  
彼らは反って、預言者を迫害したり、排斥したり  
しました。

その結果、ダビデ王朝の火も、消えそうになっ  
ていました。そのような時、神様の御心を伝える  
ために、預言者が起こされました。その預言  
者の名前はエレミヤです。エレミヤはエルサレ  
ムの近くの、アナトの地方祭司でした。

エレミヤ書1章2節、3節によりますと、

「主の言葉が彼に臨んだのは、ユダの王、ア  
モンの子ヨシヤの時代、その治世の第13年  
のことであり、更にユダの王、ヨシヤの子ヨヤ  
キムの時代にも臨み、ユダの王、ヨシヤの子  
ゼデキヤの治政の第11年の終わり、すなわ  
ち、その年の5月に、エルサレムの住民が捕  
囚となるまで続いた。」

と記されています。

エレミヤはユダ王国が、バビロニアに滅ぼされ  
るまでの40年間、迫害を受けながら、必至に神  
様の言葉を語った預言者です。地図を見て、  
直ぐに分かりますが、ユダ王国と言うのは、パレ  
スチナ地方の小さな国です。小国が生き伸び  
て行く為には、大国の傘の下に入らなければな  
りませんでした。当時、南に大国エジプトがあり、  
東に台頭してきた、バビロニアがありました。  
間に挟まれたパレスチナ地方の小国は、両大国  
の間であって、どちらの大国の傘の下に入るか  
が、大きな問題でした。

エレミヤが預言活動を始めたのは、紀元前  
627年ユダ王国の王は、ヨシヤでした。彼は神  
殿修復中に、発見された律法の書を基に、宗教

改革を行いました。それは、上からの改革で、  
政治的な面が強く、エレミヤが願ったものとは、  
なりません。ヨシヤはバビロニア派で、紀  
元前609年、バビロニアと戦う、アッシリアの援  
軍として向かう、エジプトの王ネコを、イスラエ  
ルのメギドで、阻止しようとして、待ち伏せをして、  
反って殺されてしまいました。

エジプト王ネコは帰路、ユダに寄って、即位3  
箇月の王を退けてエジプトに連れて行き、その  
兄、ヨヤキムを即位させて、ユダ王国を、エジ  
プトの属国とし、多くの科料を科しました。  
ヨヤキムは、そのために、国民に重税を科して、  
厳しい取り立てをしました。彼はそれによって、  
自分自身も贅沢三昧の生活をしたのです。目  
に余る支配に、エレミヤは、王と家臣、宗教指導  
者たちに、悪の道から立ち帰れと、正道を行うよ  
うに訴えました。そのため、王や側近、宗教指  
導者達は、エレミヤを敵視して、その活動を止め  
させようとしたので、エレミヤは信仰の理解  
者であり、また、彼の書記となってくれた、バルク  
に口述して、筆記させ、神殿で、人々に読み聞  
かせたのでした。その言葉は王にも伝えられま  
したが、ヨヤキムは、その巻物を持って来させ、  
それを切り裂いて暖炉の火に燃やしたのでした。

一方、エジプトとバビロニアは交戦し、バビロ  
ニアのネブカドネツアルが勝利しました。その  
結果、ユダ王国はバビロニアの支配に服する  
ことになったのです。バビロニアの支配は、  
エジプトに劣らず、多額の科料が命じられました。  
3年後、ヨヤキムは、ネブカドネツアルに反旗を  
翻しました。勿論ネブカドネツアルは、エルサ  
レム攻略にやって来ますが、その前にヨヤキム  
は、病死か暗殺か判明しないのですが、亡くなり  
ました。

その子ヨヤキンが王位に就くのですが、ネブ  
カドネツアルは紀元前、597年、父の代わりに、  
その子ヨヤキンをバビロンに引いて行きました。  
そして、父の兄弟ヨシヤの末子ゼデキヤを、王  
位に就けました。彼は弱い性格で、強力な側  
近達の意見に、何時も引き回され、心の定まら  
ない人物でした。その側近達は、親エジプト派  
でした。彼らはエジプトを頼みとして、

『バビロニアから、独立する事が  
自分達の生き残りだ。』

と、考えていました。ゼデキヤは勿論彼らの言

いなりです。一方、エレミヤは、バビロニアの圧倒的な軍事力を相手に、独立を主張すると言う事は、国を亡ぼすことだと考えました。

その事を伝えると共に、何よりも神様に立ち帰ること、神様に従う事を、王や民衆に訴えました。エレミヤは神殿の庭で、エレミヤ書19章15節にある通り、

『イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。見よ、わたしはこの都と、それに属する全ての町々に、わたしが告げたすべての災いをもたらす。彼らほうなじを固くし、わたしの言葉に聞き従おうとしなかったからだ。』

と神様の言葉を伝えました。

そんなエレミヤに、神殿の最高監督者である祭司が黙っている筈がありません。エレミヤを拘留しましたが、エレミヤは彼に、

「あなたはバビロン捕囚として捕らわれて行く」

と宣告しました。ゼデキヤ王も不安で、エレミヤの許に使いを出し、

「どうか私達のために、主に伺って下さい」と頼みましたが、エレミヤは臆せずに主の言葉を告げました。

エレミヤ書21章5節に、

「わたしは手を伸ばし、力ある腕をもって、お前たちに敵対し、怒り、憤り、激怒して戦う。そして、この都に住む者を、人も獣も撃つ。彼らは激しい疫病によって死ぬ。その後、と主は言われる。」

「わたしはユダの王、ゼデキヤとその家臣、その民のうち、疫病、戦争、飢饉を生き伸びてこの都に残った者を、バビロンの王、ネブカドレツアルの手、敵の手、命を奪おうとする者の手に渡す。バビロンの王は、彼らを剣をもって撃つ。ためらわず、惜しまず、憐れまない。」

とユダ王国の滅亡について、エレミヤは命掛けで、ゼデキヤに進言しました。しかし、ゼデキヤは、そのエレミヤの進言を受け入れないで、治世の9年目に、エジプトの新しい王の援軍を頼みとして、バビロニアに謀反を起こしてしまいました。

結果は、紀元前587年の、エルサレム陥落、バビロン捕囚となり、ダビデ王朝は終焉を迎えました。では、神様が、ダビデに与えられた契約

はどうなったのでしょうか。エレミヤは、23章1節から、

『災いだ、わたしの牧場の羊の群れを滅ぼし散らす牧者たちは。』と主は言われる。」

とあります。ここに書かれています牧者は、明らかに、ヨシヤ王の後に立てられた、エレミヤと一緒に生きた王達と、その追従者たちの事です。彼らは神様に聞かず、人間的な判断で羊である国民を迷わせ、私利私欲のために羊を食いものにしたのです。神様がお怒りになるのは当然です。23章2節に、

『あなたたちは、わたしの羊の群れを散らし、追い払うばかりで、顧みることをしなかった。わたしはあなたたちの悪い行いを罰する。』と主は言われる。」

とあります。エルサレム陥落、バビロン捕囚はその報いでした。

神様は、確かにダビデの子孫の王達とユダの民を厳しく罰せられました。しかし、全ての者が神様に聞き従わなかったわけではありません。神様は何時の時代も、神様に、心から信頼し、聞き従う残りの者と呼ばれる存在を起こされるのです。神様はその人達によって、人類救済の歴史を導いておられます。その約束が23章3節に、

『このわたしが、群れの残った羊を、追いやったあらゆる国々から集め、もとの牧場に帰らせる。群れは子を産み、数を増やす。彼らを牧する牧者をわたしは立てる。群れはもはや恐れることも、おびえることもなく、また迷い出ることもない』と主は言われる。」

とあります。

エレミヤは捕囚で、バビロンに連れて行かれた人々に、信仰の復興を期待していました。彼らに手紙を出して、

『神様は、70年経ったならば、必ず捕囚を解いて、エルサレムに帰還させて下さるので、それまでは、バビロンで家を建て、仕事をし、家庭を築き、人口を増やし、その町の平安を祈りなさい。』と勧めています。

29章11節には、

「わたしは、あなたたちのために立てた計画を、よく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。」

と神様は言っておられます。神様は、羊が迷い出る事もない、良い、真の牧者、真の王を立てて下さるのです。それはどの様なお方か、と言うと、

23章5節に、

「見よ、このような日が来る、と主は言われる。  
『わたしはダビデのために、正しい若枝を起す。王は治め、栄え、この国に正義と恵の業を行う、』」

とあります。

人間の側は、あきらめたり、忘れたりしますけれども、神様は、決して契約を忘れたり、破ったりされることはありません。神様御自身がダビデの家の、正当な子孫の一人として、真の王をお与えになるのです。エレミヤは続いて

6節に、

「かれの代にユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。彼の名は、『主は我らの正義』と呼ばれる。」

と預言しました。

実は、ゼデキヤと言う名前の意味は、

「ヤハウエ(主)は正義である。」

と言う意味なのです。しかし、彼は名前とは正反対の生き方として、羊である民を苦しめ、迷わせてしまいました。けれども正しい若枝として来られる真の王は、

『ヤハウエ(主)は正義である』

との実体を見せてくださるのです。

神様は、真の良い牧者、羊のために、命を捨てる真の王、真の救い主を、ダビデの子孫から、生まれさせてくださると言う事を預言しました。エレミヤは、ユダ王国が滅びてしまった真つ暗な中で、神様がお与えになる、真の王の光を見詰めていました。その王の到来のために、神様は、バビロン捕囚民を育て、必ずエルサレムに帰還させてくださる。その時、主なる神様への信仰は篤く、正義の王の下で素晴らし神の国になると、彼は確信していました。その確信から、

7節に、

「それゆえ、見よ、このような日が来る、と主は言われる。人々はもはや、  
『イスラエルの人々をエジプトの国から導き上った主は生きておられる』  
と言って誓わず、

『イスラエルの家の子孫を、北の国や、彼が追いやられた国々から導き上り帰らせて、自分の国に、住まわせた主は生きておられる。』

と言って誓うようになる。」

と預言しました。エレミヤは今、肉の目には見えていないにも拘わらず、霊の目、信仰の目で、はっきりと見ていました。

そして、歴史は、その通りに動いたのです。神様が歴史を導いておられることが、明らかにされました。神様は、アブラハムの祝福が、人類救済のための、神の御子、真のメシアが、ダビデの若枝として、この世に到来されることである事を、時代と共に、明らかにして下さいました。人間がどんなに、それを阻もうとしても、神様の人類への愛と真実は、歴史を貫いて来たのです。人類を決して見捨てず、人類救済の歴史を導いて下さる、創造主なる神様に感謝し、神の御子イエス様のご降誕を心から待ち望みましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

待降節に入りました。罪の深さも、行き着く先も分からず、我欲に生きる人間を、愛する故に、怒り、憤りながらも、人類をお見捨てになることなく、救い主、イエス・キリストをお与え下さった神様のご愛に感謝いたします。

迎えました待降節を、日々悔い改めつつ、神様のご愛と真実を更に深く思い、主イエス様のご降誕に感謝し、再臨に備える者とならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈り致します。

アーメン。